



河 戸 八 木 進

大正・昭和初期
竹田川の河戸

●坂の下河戸 坂の下河戸は橋北で一番下流の河戸で、十二段程の福井石尺六の立派な石段で出来ており、舟着場兼生活洗場も三尺板石が十二尺程並べられて、地域全体に利用されていた。三国から小荷物や川砂・砂利の荷揚げが頻繁に行われた。河戸の向う岸は浅瀬で、坂の下・古町区の馬洗場として利用され、馬河戸と呼んでいた。

●みそや河戸 生活河戸兼用の舟繋場でもあった。終戦後は三国新保からラッキョが荷揚げされ、加工用洗場として利用された。

●青辰河戸 整備された舟着場で、青辰石材店・岡部商店が主な利用者であった。石材や肥料が荷揚げされ、米が三国湊に積み出された。

●十日河戸 この両河戸は町の中央、市姫橋の下手に向き合って、片や六日区・新区、片や南金津中心街の舟着場で、上りの舟では雑貨、海産物・豆粕などが荷揚げされ、地域の商業に大きな役割りを果たしていた。

●水口河戸 この頃はまた上新橋も浦安橋もなかった。桜井河戸からは米が積み込まれ、三段口河戸では砂利や川砂がおろされた。

●新橋河戸 これらの河戸は、その地域の生活河戸として重宝がられたが、水道や洗濯機の普及と河川改修によって、今は殆んど面影すらも見る事ができない。便利にはなったが長閑な風物は消えた。

た ず ね
あ る 記

明治・大正は私どもにとって遠い時代になりました。竹田川の河戸について古老の方を尋ね歩きましたが、その頃のことを知っている人も少なくなって、百年という年月の隔たりをしみじみと感じました。そのお話の中で驚いたことの一

つは、水口区から坂の下区にかけて北金津十ヶ所、南金津四ヶ所、更に上流にかけて稲越・矢地・清岡・御藤尾・桑原・次郎丸・疋田など、各区毎に舟着場を兼ねた生活河戸があったということです。昔から三国湊への舟運が栄えて、のどかな田園の中を上り下りする舟が少なくなかったようです。

金津地区にも舟主が居りました。水口区の桜井惣七さんの先代までは、三国湊へ下りは米、上りは豆粕などを運ぶ自営の舟を持っておられ、又古町の馬場さんは「おもて屋」という屋号で三国通いの川舟運送業を営んでおられたそうです。

坂の下区の清水さん親子も三国通い自営の水手でした。水高の多い時には舟べり五艘位まで荷を積んで、櫓と權とで上り下りしたそうですが、水量の少ない時に重荷をすると舟底が川底について動かず、一人は陸に上って綱をかついで引き舟をしたそうです。

初代の善太郎さんの頃(昭和三四没八二才)は三国通いの舟運が繁盛したので、息子の吉太郎さん(昭和五五没七八才)が成人すると、もう一そう舟を購入し、二隻で親子共々働いたそうです。

善太郎さんが隠居した後、子息吉太郎さんと弟の清さん藤一郎さん兄弟三人が舟運業を営み、米・川砂・砂利・肥料・海産物その他日用雑貨、食料品などを運んだそうです。吉太郎さんは故人となられ、清さんは太平洋戦争で戦死されました。藤一郎さんの一番印象に残っているのは、砂や砂利の荷揚げの苦勞だそうです。藤づるで編んだ紅繩と呼ぶ籠に砂を盛って、天秤棒で担って、舟べりから堤防に渡した踏板を渡って石炭箱に移す。次に荷車でセメント工場や作業現場に運ぶ。なかなかの重労働で苦勞が多かったそうです。

その当時、自動車には米六十俵位積んだそうですが、舟では百俵程積み、三国まで運んで運賃は五円から七円、相当の収益があったそうです。殊に春は、橋北の堤防には桜並木があつて、その花の下を舟で通る時は楽しいものでしたと語っておられますが、今は桜並木もなくなり、川岸の菜の花畑もれんげ草も稀になって、のどかな田園風景は遠い夢になってしまいました。

昭和の中頃、竹田川の通い舟にもエンジンが取付けられ、今までの何倍もの仕事ができたそうですが、水高の少ない時はエンジンが空転して、昔ながらの櫓や權に頼るよりはかかったそうです。

昭和十六・七年頃から燃料が配給制になり、清さんは応召することになり、川舟輸送は荷車による陸路輸送、便利屋さんに変っていきました。

自動車運輸の発達した今は、全く夢のような世界でした。